

華山は何と答えたか？

「こういうことはご当地の人でないと先方の実情も実生活もわからぬでしよう。またことが破れても、この地の風習があるでしょうから、私のような他郷の者の思う通りにはいきません。その家と親交のある方とか、五人組というのもあるでしょう。そうした人にまず相談したいかがでしょう」

華山はこんな風に答えた。優等生的模範解答である。だが華山の立場としたらそれ以上は無理というものだろう。のぶは胸の内を打ち明け、聞いてもらえだけで心はかなり晴れたのではないだろうか。

かれこれと考ふるに今風波なからん事を思えど、なごて其源の激揚をとむるやうあらんや。おのれかくおもふめれど御身いかに思ひはかり玉ふや。

何事かと思つたら、おのぶの、一人娘可愛らしさからの綿々たる繰り言であり、それをまともに華山にぶつけた。華山も面くらつただろう。だがのぶは夫に先立たれたばかりの身、不安で揺れ動く心情をぶつけ、受け止めてくれる人がいるだけで心が軽くなつたのに違ひない。

誰もがそれぞれの人生ドラマを懸命に生きていた。悩んだり迷つたり悔やんだりしながら必死にもがいていた。それを同じ目線、思いで聞いてやる。おそらく春風駘蕩たる温顔をもつて聞いていたのに違ひない。華山の表情が目に浮かぶようである。

(4) 渡良瀬川からの贈りもの

十六日、大間々の高津戸へ行つた帰り道、天王宿の今泉定右衛門宅へ立ち寄た。この人は岩本茂兵衛の養い親にあたりたいへん世話になつた人である。親子孫三世代の夫婦が揃つていてなんともめでたい家だつた。

香魚図
華山画16

大きさ一尺四五寸（四十二センチ
（四十五センチ）、重さ百十五匁
(四百三十一グラム) というとて
つもない大鮎で、今日ではギネス登録級サイズである。鮎の成育条件が理想的な環境であつたことが推測されるのである。

その翌のこと。

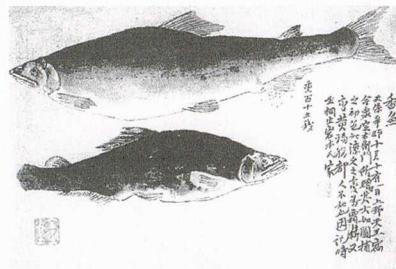
天王宿定右衛門方より鮎來たる、予のためかこひて今日に及、鹽より
いだし見るに其大一尺四五寸重量百十五目、驚きたり、写真す、此昼飯
に塩焼として食ふ、味美一尾つくす、真に可記也。

華山は江戸、それも江戸城近くの麹町、いわば江戸のど真ん中で暮している。生糀(きこうじ)の江戸っ子である。季節の風物詩として鮎を口にしただろうが、こんな鮎のような巨鮎は初めてだ。腹の中にははち切れんばかりに卵が入っている。

渡良瀬川の大親分のような野性的な面構えをしている。巨鮎の堂々とした面構えに度肝を抜かれた華山の表情が目に浮かぶ。

一方、定右衛門は天王宿の自宅でニンマリしていたに違ひない。その遊び心のお陰で渡良瀬川の貴重な香魚図が今日に残された。

今泉定右衛門



「香魚図」紙本着色 28.8×41.0 cm

大手製麺会社「今定」、国道五〇号沿い人気うどん店「定右衛門」と、今泉定右衛門は屋号として今日でも大いに活躍している。

坂東太郎(利根川)第一の子分が渡良瀬川で、時に手に負えない暴れ川である。その上流は良い墓石の産地として知られる。川床には丸い巨岩がごろごろしている。巨鮎が育つ絶好の条件を備えていた。

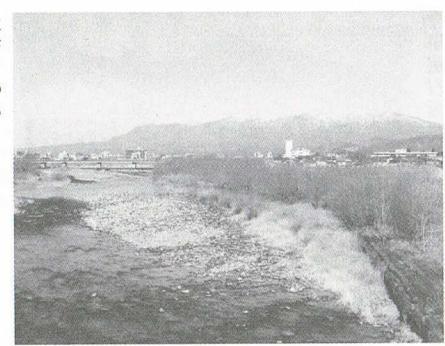
華山は渡良瀬川を「深山より流れ出て暴流言ばかりなし」と表現している。

渡良瀬川

松原橋から見た渡良瀬川。赤城山、桐生の市街地、背後の吾妻山が一望される。

古くは平安時代より、沿岸の地域から朝廷に鮎を献上したという木簡が残されているほど、鮎は豊富な川であった。
明治九年の記録では、渡良瀬川の漁獲高がこう記録されている。
「大間々町八十三万匹、広沢村三万三千匹、境野村十二万六千匹、毛里田村一万三千匹」（山田郡史）

この他にも小俣、葉鹿、足利と大量の漁獲があつたはずである。葉鹿では珍味ウルカ（鮎の内臓の塩辛）の販売店があつたと華山は記している。沿岸で暮す人たちにとって、鮎は渡良瀬川からの恵みの贈り物であった。



大鮎について

四十七センチ超の巨鮎なんて見たことも聞いたこともありません。一度はそんな大物と格闘してみたい、と釣り人の誰もが憧れるロマンですね。

（両毛漁業協同組合長中島淳志氏）

大鮎について

さらに輪をかけたのはダムの存在である。上流より草木ダム、水沼の取水ダム、高津戸ダム、最下流の渡良瀬遊水地と多くのダムによつて分断され、かつての「暴流言ばかりなし」の勢いはすっかり影をひそめた。去勢されたように静かな川となつてしまつたのである。

根本山道中案内図

江戸から根本山への参拝客へのガイドブックが印刷されていた。道中には、所々に休憩所や土産物屋があった。



(5) 幻の根本山登山

桐生川源流にある根本山登山を計画していたが、あいにくの悪天候のため中止となる。

けふは下野の根本山へ参らんと、宵より行厨酒壺などを用意せしが雨降りて止む。根本山下野の国にありて足尾日光に連る。

根本山は当時下野（栃木県）の地とされ、彦根藩井伊家の飛び地藩領であった。現在は桐生市に入っているが、防火防犯の神のいる信仰の山として、江戸や広く関東一円に多くの信者がいた。

華山はその理由となる言い伝えについて詳しく記述している。

土人（土地の人）云う、山上に黒兵衛天狗おはしまし火除盜賊除きはめて神なり。彦根侯別封の地にあり、かつて麴街失火の時其藩甚あやふし、一邸の土、力をきはめ火を救ふ、其の中に一土人異常なるありて東走西奔飛鳥の如く防火をなす、いかなる人やと司どもよりあひて火止の後姓名をとひしかば我は根本にある黒兵衛といふものなりとて姿見えず